

# 人間吉田松陰

山中鉄三

## 目次

序 ..... 一

一、兵学者時代 ..... 二

二、求道者時代 ..... 一〇

三、下田踏海失敗以後之時代 ..... 二〇

    前期 (一)野山獄 (二)杉家幽囚

    後期 (三)野山獄再入獄と刑死

四、思想的変移の概括 ..... 二五

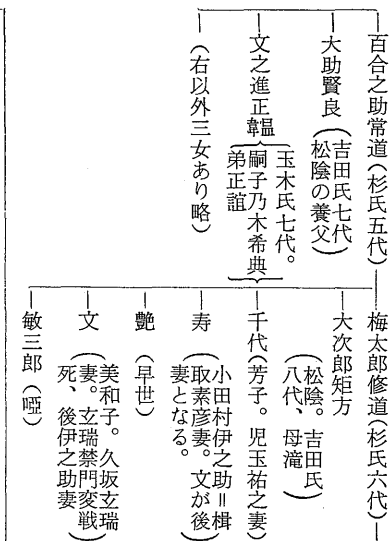
## 吉田松陰の全貌

### 序

吉田松陰ほど時代により人物評の流動する例は尠い。最も古く徳富蘇峯の革命者をはじめとして勤王主

義者、国家主義者、教育者、ヒューマニスト、さては兵法学者、キイ・パースン等々。私は行動者としての詩人哲学者、死の哲学者とでも言いたい。

松陰の生家杉氏の関係部分を抄出すると、



小太郎(松陰嗣子)

山鹿流兵法家吉田大助は叔父であり養父であるが、

吉田氏について松陰は「吉田氏は世々不幸にして或は国亡びて節に殉じ或は短命にして子なし独り矩方身づから邦典を犯して以て覆敗を致す。不幸には非ざれども不孝の罪これより大なるはなし」<sup>(4)</sup>（丁巳幽囚文稿）と述べている。更に「狂疾ありて流に処せられ終る所を知らず」ともあり杉家から吉田家に養子となつた松陰は何か象徴的に思われるようである。松陰は幼名虎之助、吉田家を継いで大次郎、後に寅次郎・義卿・松陰（東北亡命罪で浪人となる名）二十一回猛士、その他書簡などには狂夫、賊子奸婦同科寅二などたわむれの名を用いている。

三十才で刑死した松陰破乱の生涯はまさに破乱狂乱（松陰みずから狂乱・狂夫・狂愚・狂頑・狂狷などを用的）の文字に尽き失敗の連続に終つた。——少くとも形の上では失敗の生涯だったが、その生涯を生き抜いた生き方の見事さをみなくてはならない。その生涯を私は兵学者時代・求道者時代・下田踏海失敗以後の時代の三期に分け、年令的には十代・二十代前半・

二十代後半に分けたい。

## 一、兵学者時代

松陰5才、山鹿流兵学者師範で毛利氏仕藩吉田家養子。9才（天保九年一八三八）明倫館出勤。11才（天保十一年）藩主慶親（敬親）の前で<sup>(5)</sup>武教全書「戦法篇」を講義。15才、同じ武教全書と孫子虚実篇を講義。養父吉田大助（松陰六才時に死去）の兵学門の高弟山田宇右衛門（治心気斎）、実父杉百合之助、叔父杉（玉木）文之進、林真人などが山鹿流兵学の生涯の師であり、特に文之進は子のためか松陰に学問と人間教育を賭け天保十三年に松下村塾を起し松陰（十三才）や兄梅太郎、久保清太郎、山県半蔵（安戸磯）等を教育した。

この年、治心気斎は江戸遊学から帰り松陰に新知識として「坤輿図識」を与え世界情勢への関与を植えつけた。16才（弘化二年・一八四五）長沼流兵学山田亦介（含章斎）（毛利藩政改革者村田清風の甥。松陰は年令を超えた清風にも私淑）に就く。亦介は西洋陣法や海外事情に造詣が深く、ために松陰の海防経営や時務

論への関心は高まり「世界地理書輿地志略」(青地林宗訳)を借り意欲を燃やす。17才(一八四六)長沼流免許。佐藤寛作(兵要録)・飯田猪之助(西洋陣法)

・守永弥右衛門(萩野流砲術)を学び伝授を受く。

若き松陰の著書<sup>⑥</sup>「異賊防禦の策」<sup>⑦</sup>「外夷小記」

その他。18才(弘化四年)林真人より大星目録の免許返伝を受く。著書<sup>⑧</sup>「寡欲録」その他。19才(嘉永元年・一八四八)師範となる。

<sup>⑨</sup>「明倫館御再興に付き気付書」を藩主に上呈する。

(前後に江戸伝馬獄出火あり、高野長英脱獄、佐久間象山洋式野戦砲を鑄造、江川太郎左衛門伊豆七島を巡視。)20才(嘉永二年)藩命を受け萩より彦島下関まで海岸巡視台場の検当と海防意見を具申。藩公初めて萩羽賀台で大演習を行ない門人の重臣益田弾正が将となる。清風・松陰参加。養母吉田クマの実家森田家が本陣となる(現在重要文化財)藩主に武教全書用土篇を講ず。著書に<sup>⑩</sup>水陸戦略・<sup>⑪</sup>対策一通・<sup>⑫</sup>兵学寮提書・<sup>⑬</sup>門弟等級之次第・その他。21才(嘉永三年一八五〇)藩主に中庸慎独の章と武教全書守城篇、籠城の大

将心定めを講ず。この年九州に旅立ち平戸、長崎、熊本に遊学(松陰第二期求道者時代に入る―後述)著書に<sup>⑭</sup>西遊日記・未忍焚稿・上覧控・公事記。

さて、順序が逆になるが、松陰の生い立ちをみなければならぬ。松陰出生の家は、毛利家墓地東光寺の横から登る団子巖という丘の中腹で萩市が眼下に望まれ、今は家の敷石と松陰墓(傍に晋作墓など門下の墓)と、松陰と金子重輔の銅像がある。曾て俳人八谷聰雨の家であって、女流俳人一字庵田上菊舎が訪門しその樹々亭で、△閑けさを樹々にきかれよ秋の雨▽の句を残した(菊舎「樹々亭の記」)その家であった。

玄関の三疊、六疊二間、台所、厩と納屋の別棟があり、そこに杉一家の大世帯が住んでいた。百合之助夫婦、叔父吉田大助(天保三年分家、松陰五才時天保五年養子となる)叔父玉木文之進(天保八年分家)兄梅太郎(明治)以下三男三女、それに百合之助の母の妹(岸田)が寡婦となり舅と一児をつれて同居し、一時は十三人家族であった。この環境が松陰には生涯を決定する教育環境となった。

母滝の言語に絶する刻苦勤儉の田畑仕事、子弟の世話、松陰は後に母に感謝し母の絶大な教化力を折にふれて書き残した。(明治十六年皇太后、皇后より羽二

重一匹を母に賜わる)父の百合之助の四書五経や神国由来(玉田永教著)に基く勤皇精神の教育、特に文政十年仁孝天皇詔文は松陰の胸に畳まって消えることはなく。江戸護送の時も「奉別家大人―狂児矩方再拜」<sup>(4)</sup>(東行前日記)の詩に薰陶のことにふれて、幕府を諫示する決意にまで高められているのを知ることができる。

詩の一部をみると、平素趨庭違訓海(平素は父の庭訓に違い)斯行独識慰嚴君(江戸護送のことも父上の心を慰めることになるだろう)耳存文政十年詔(仁孝天皇の幕府への詔書に対する幕府の非礼は今も耳に忘れません)小少尊壞志早決(「神国由来」の精神は少年時代から確立しています)の詩句の結びに、真向東天掃怪雲(江戸表に出て誠意を尽し幕府に直諫します)。松陰の姿勢は既に家庭環境の教育から醸成されていることを知るのであるが、勿論江戸や長崎、水戸

をはじめ各地への遊歴がそれを推進し大成されたことは後に述べるとおりである。

四

樹々亭に松陰は十九才まで生活するのであるが、九才(天保九年)までそこに叔父玉木文之進が同居し父に次いで家庭教育、及び学問指導に当たった。学問的には父以上の嚴父であり、天保十三年松下村塾を開き十三才の松陰に英才教育を与えた。同門に兄梅太郎、安田辰之助(山県半蔵、後の宍戸磯。後の松陰の師山県大華の養子)、久保清太郎(後に松陰門下。父の五郎右衛門は松陰の養母吉田クマの養父で、玉木文之進の松下村塾を襲用し安政四年に松陰に委した)などがいた。兵学は叔父大助(後に分家し吉田大助、松陰の養父。松陰三才まで樹々亭に同居)に学び、松陰が兵学師範となるや文之進は家学後見となり明倫館都講となり藩の要職にあって、夙に松陰の天分を見抜き、その人間形成上及び学問に絶大の影響を与え、藩公にもわが師は玉木文之進と答えているし、一般藩士も玉木先生と呼んでいた。後には強く松陰を信じ己が教育信念「凡士となること勿れ」の理想を松陰

に託しその体顕者として疑わなかった。松陰の東北亡命も下田踏海も野山獄再入獄の時も文之進の松陰に寄せる信頼は、これは母瀧も父百合之助も兄梅太郎も同様であるが、特に強く信ずるところがあつて弁護の立場に立った。

のち松陰門下前原一誠の乱にも文之進は理會応援し遂に一誠の失敗をみて割腹した。文之進の子彦介も松陰門下となり松陰路線に殉じ御楯隊に入り俗論党に対し繪堂の戦に参加。養子に迎えた真人(文之進門下乃木希典の弟)も文之進三男小太郎(松陰刑死後九代吉田家を継ぐ)も前原の軍に加わり戦死。このように文之進の一統は松陰の思想体系を信じて疑わなかった。次に兄梅太郎の松陰への協力はまた絶対的だった。遊歴時代の経済的援助や野山獄時代の差入れや書物の提供など物心両面にわたり献身的だった。

松陰は兄には気儘に多くの無心や思想や苦患を告白し、兄はそれに応じ親にだけは心配かけるなど忠告もし激励もしながら最後まで弟松陰に絶望することはない。兄は松陰より常識的で、それを松陰は知って

安心して自分の行動を果したといえる(このことは書簡集に詳しい)弟は「黄浩気あらばご心配に及ぶまじく」とあるが兄は心配せずにはおられない。「禁を犯して海を航するを悪むなり」と言えば松陰「兄なれば嫂を盗みて娶り孤女の婦翁を過つ者、古も亦之有り何ぞ独り吾のみならむや。而又何ぞ憂へん」と言い「禁は是れ徳川一世の事、今時の事は將に三千年の皇國に關係せんとす。何ぞ之を顧みるに暇あらんや」(4)(書簡)とまことに松陰は兄に対しては自在に安心して言うのであった。松陰の下田踏海は日本三千年の國法に則つて実行したのだと言うのである。梅太郎は、叔父文之進の村塾の門下(松陰と共に)となり兵学は叔父大助(松陰の養父)に就き明倫館居寮生(特待生)となり松陰亡き後は村塾を受け継いだ人物である。以上が家庭環境で松陰の学問・思想・兵学に絶好の場となつたのであるが、ここに母のことに触れねばならない。

母の仁愛勤儉の無言の訓育はやがて苦しい遊歴時代に堪え得た精神と肉体を培つたのである。松陰の一面

を見るに、堅忍不拔の精神と素衣素食に堪え得る肉体は母を通じて得たものであった。「梅干と味噌の食事」<sup>69</sup>（書簡）の江戸生活、<sup>70</sup>東北遊の「雪中の難行程」など、西に疾り北に駆ける松陰紀行にみる強行はそれを物語っている。「海舟勝翁に聞く象山の家に、鬢蓬の如く瘦骨衣に勝へざる如く」（蘇峯「吉田松陰」）はその一端をよく描写している。この母を通じて女性の偉大さ尊さを知り、有名な妹千代宛書簡はそれを如実に示している。

これは女性教育論でもあり教育環境論でもあり、松下村塾の松陰教育とは別な意味を持つものであり重大である。そこにみる松陰は思想学者行動者ではなく、やさしい心の松陰である。「夜着をかむりてふせり候へども如何にもたへかね、又起きて御文くりかへし見候ていよいよ涙にむせび、つひに夫れなりに寝入り候へども、まなくめがさめよもすがら寝入り申さず、色々なる事思ひ出し申し候云々」<sup>71</sup>（安政元年）とあり妹より九年母（みかん）かつをぶし等を届けられたお札に寄せて、孝養せよ・老人は家の重宝・手習よみも

六

のに心がけよ・兄の話を聞き本を読んで貰え・「人の子のかしこきもおろかもよきもあしきも大てい父母のをしへに依る事なり、就中男子は多くは父の教を受け、女子は多く母のをしへを受くること又其の大きいなり。さりながら男子女子ともに十歳已下は母のをしへをうくること一しほおほし（略）母は常に内にあればなり。然れば子の賢愚善悪に関する所なれば母の教へゆるがせにすべからず。併しその教へといふも十歳已下の小児なれば言語にてさとすべきにもあらず。只だ正しきを以て感ずるの外あるべからず云々」・胎教のこと・氏より育ち・舅姑、夫を敬すべし・先祖を敬ふべし・神明を崇めよ「世俗にも神信心といふ事する人もあれど大てい心得違ふなり。神前に詣でて拍手を打ち立身出世を祈りたり長命富貴を祈りたりするは皆大間違なり（略）」心と体の正浄を祈るべし・「とかく婦人の詞よりして親族不和となる事多し忘るべからず」・杉家の六つの美事（先祖を尊ぶ・神明を崇む・親族睦じ・文学を好む・仏法に不惑・畠仕事をすること）等々。以上の松陰の文には後の獄の<sup>72</sup>福堂策の論や浩

然の氣勢はその時点にはなく一介の士農の姿を最も自然な形で、所謂教養人としてのみ現われている。人をみて道を説くといわれる広範な人間性が松陰の中に蔵されているのを知るのである。これらは家庭環境を礎として得た教養であるといわねばならない。

松陰の環境教育の方法論は村塾の教育に重大な方法として拡張され実施されたが、前に述べたように家庭環境の中で兵学研究に没頭をしていた十代の経緯こそ松陰を構成する重大な素地となったものである。この兵学の方法と論理と倫理は松陰の生涯の方法となつて、松陰は思想家、教育家でなく兵法学者だと断ずることができるとの一面を示したのである。学問、文学、訓育の家庭環境から組み立てられた松陰の人間素養と兵法学から体得した人生観が十代の松陰、いや生涯の松陰の人間像を造型したといふことができる。それは六義と兵法の混融となり、学問も兵法の論理方法において理會し、兵法は孝悌に通ずると論及し、芸術にすら当嵌めるのである。松陰の論理に「志」は指導理念になっているがこれにも兵法の倫理が働いている

のをみると、まさに松陰の人生観は十代の家庭と兵学研究によって成されたと言つてよいと思われる。

先きに松陰の十代の歴年を記述したのも兵法学の占める位置の大きさを知るためであった。松陰の兵法学の大成は叔父大助（吉田家を継ぎ松陰はその養子となる）の他に山田宇右衛門（大助の高弟）、山田亦介（長沼流。禁門の変敗後恭順派の手に刑死）、林真人（吉田他三郎||松陰の養祖父の門下。松陰を自宅に入れて指導）などによって大成され、十代（十六才吉田家養子以後二十代初頭にかかる）の兵法学松陰の門下は一五二名（安政六年まで二三三名）になり「兵学寮掟書条々」（嘉永元年十九才）を作り厳しい指導を加え後世多くの志士としての人物を育成した。兄の梅太郎、宍戸磯、久保清太郎、中村道太郎、益田弾正、桂小五郎などがおよそ松陰十代の兵法門下であった（兵学入門起請文による）右の掟書条々はその指導理念だが、<sup>99</sup>「武士としては義を守り、法を正し孝悌忠信礼義廉恥の行を励み深く文学に志し常に武芸を遊び古の忠臣義士に及ばんことを冀ふ。是れ則ち本分の職にして御

奉行の基本に候云々」などはいかにも松陰十九才時の理念であり、生涯の基本的な要素であった。後世他の理念が混入しても少くともこの姿勢は基本になっていた。

明倫館には文学・兵学・武術の三部門があるが松陰は兵学寮稽古の規則を定めた。その中に「上等の衆の儀は七書其の外諸家の書、討論相催すべく候事」「中等以上の衆、伝書討論会相催すべく候」「初学其の外会外の衆、聴聞あるべく候事」云々とある。松陰はデイスカッションを規定していて面白い。この方法は村塾時代の教育方法に拡大されている。「講習討論の節、勝つ事を好むの心を持ち人の議論を排斥し私の意見を遂げ候儀深く相誠むべし専ら義理を明かにするの心懸肝要たるべく候事」など正に民主的ルールを示している。

松陰十代の思想は<sup>80</sup>未忍焚稿に残され、十五才から二十一才の考え方を知るに便である。要点を順を逐って摘録すると、「孫子・呉子・李靖は蓋し(兵学として)其の尤なる(勝れたる)者なり云々。三采幣の事

八

(山鹿素行「武教全書にある大将としての三つの心得)三子の説と同じきこと符節を合するが如し)(松陰十六才時)と言ひシナの兵法と日本の兵法の奥を極めた発言をし、また<sup>81</sup>「忠とは功ならず実なり」と喝破し、<sup>82</sup>異賊防禦の策に四者法(人材・器械・操練・兵法)と三者法(軍団組織・輸送・軍馬)の重点を論じ(十七才時)、また<sup>83</sup>香川甫田(松陰幼時の師の一人)に撃鼓の法(序破急)を論考し(同年)、また士農工商の相異を説き「士たる者は禄を公上に食み耕さずして粒米以て腹を充たすに足り織らずして布綿以て身を蔽ふに足る。故に生れては則ち逸し腹た憂勤の心あることなし云々。故に士たる者は其の志を立てざるべからず。夫れ志の在る所、気も亦従ふ。志気の在る所遠くして至るべからざるなく難くして為すべからざるものなし云々」<sup>84</sup>(弘化三年)と十七才にして実に堂々たることを論じ、この姿勢も将来ともに消えることはない、老成の境である。また、論語への着眼も忠孝仁道のことではなく里仁篇をみて「人を観る者、過(失)に於て俄かに之を棄つべからず」と道破するは面白い。



人はとかく過失をみて人物評をする傾向のあることを警告する。また、十八才時には、萩の児島に着眼し<sup>89</sup>軍備の地を指摘し（戦後アメリカ兵が駐留）、また<sup>90</sup>スパイ論を強調。これは後世松陰が情報収集の天才ぶりを發揮する素地とみられる。また<sup>91</sup>劍の説に「劍は一人を之れ敵とするは非なり云々。国家を既に危きに安んじ黎民を既に溺るるより援はば斯に以て劍の徳を尽すに足る云々。身を衛ること固より言ふに足らず徒らに身を衛ることを知る者安んぞ能く国を安んぜんや」（十九才時）松陰にとって為すことはすべて己れの思想体系に統一して組み入れられるように思われる。

松陰は<sup>92</sup>劍と馬術とを萩では勿論江戸でも続けていた。そのため齋藤弥九郎（その子新太郎も）なども江戸から萩に来て松陰に入門し劍は市民に教えるようになったほどである。二十才になり藩命を受けはじめて萩市外に出て北浦を下関まで海防施設の具申の旅に出た（<sup>93</sup>廻浦紀略）これが二十一才以後の遊歴時代のリハーサルであり、十代の総仕上げの趣である。

十代をやや詳しく紹介したが松陰の全人間像の礎と

もなっていて重大である。松陰は詩人である。膨大な<sup>94</sup>漢詩集の十代をみると兵法学を学ぶ人柄にとって意外なほど風流韻事が多く隠遁読書三味の遊芸の境を志向する趣がある。松陰の兵法受容の姿勢は、兵法だけではなく他の学問も同じだが、それを単一な学問として受容するのではなく常に人生的解釈が加えられ思想体系の一つの方法論として許容されている。解釈と批判が同居し、人体に広く消化されてゆく、哲学化されてゆく、それは講孟余話をみても明らかで孟子の解釈批判が混然と両在し松陰の哲学が形成されているのである。従って、十代の松陰の兵法時代と風流韻事詩とは矛盾のごとく見えて矛盾でなく詩人哲学者の統一体だとみてよい。

松陰の言辞行動に一見して矛盾のように見られる面が多々あるが、複雑な要素の統一された詩人哲学の、その都度現われる一面に目を奮われるからである。一つの学問だけを受容し忠実に守る者には矛盾現象は起らない筈である。経書の哲学、兵法の哲学、史書の哲学、文学の哲学など、人間松陰の哲学が成されている

ので、ダイヤの細かいカットが幾様にも光りを放つに似ている。思索に狂じ、行動に狂じ、時務に狂じ、詩に狂じ、狂じながら狂じることに自慰を得、自嘲（批判）を加え前進してゆくのである。風流へのエネルギーも尊皇攘夷討幕もエネルギー源は松陰の肉体にある。隠遁も戦争もその大なるものは同じその人のエネルギーであって、現われ方の裏腹な一面である。

十七才の詩をみると、柳梅鶯雪など自然美享受、独楽杯酒、客稀読書至楽、春眠、喫茶、籠居、逍遙、超俗、楽涼、天地自然即国家、夢中逢高僧、風流三昧。十八才の詩に逍遙、交友と風流春色、喫茶、超俗雅趣、閑中無事、庭前夜雨。十九才は守愚、読書清遊、風景詩趣、荷声千点、閑暇韻事、脱詩文書画、兵学志向、漁舟図に題す、山紫水明、笑詩歌人、山行値雨図、舟遊、自嘲、孟蘭盆、寄友。など総じて風流雅趣に遊ぶ心であるがこれが二十才に入って俄然時局論や危機感に変じた内容の詩となるのである。

註 卷数は大和書房刊吉田松陰全集で、旧とあるのは岩波昭和九年版の全集である。

- ①四卷吉田氏略叙 ②一卷 ③一卷未及焚稿 ④旧九卷  
 ⑤一卷未焚稿 ⑥⑦一卷上書 ⑧⑨⑩同上、十七才諸論文は多く一卷参照 ⑪⑫九卷 ⑬七卷（特に安政元年）  
 ⑭同一四〇号 ⑮同一五号、九卷費用録 ⑯九卷東北遊日記 ⑰七卷一三八号、一五八号、二〇二号 ⑱二卷野山雑著 ⑲⑳一卷未焚稿 ㉑同四八頁 ㉒同未忍焚稿六一頁 ㉓同六八頁 ㉔同七〇頁 ㉕同七六頁 ㉖同八二頁 ㉗七卷書簡、九卷辛亥日記 ㉘九卷 ㉙六卷、一卷その他に散見

## 一、求道者時代（遊歴時代）

- 九州遊歴（嘉永三年、21才、四ヶ月間）  
 萩・長崎・平戸・熊本・萩<sup>(1)</sup>（西遊日記）  
 江戸遊学（嘉永四年、22才、五ヶ月間）  
 萩（兵庫楠公墓・伏見・江戸<sup>(2)</sup>（東遊日記）  
 房相踏査（同）江戸生活など<sup>(3)</sup>（辛亥日記）  
 江戸・鎌倉瑞泉寺・金沢・浦賀・江戸（書簡七巻）  
 東北亡命旅行（同年末、23才、四ヶ月間）  
 江戸・水戸・白河・若松・新潟・佐渡・弘前・今別  
 ・青森・小湊・盛岡・仙台・米沢・若松・日光・足

和・江戸 (東北遊記・東徂程)

萩護送行 (同)

第二江戸遊学 (嘉永六年、24才、四ヶ月間)

萩・周防富海・讃岐・多度津・摂津・河内・大和五

条・岸和田・奈良・伊賀・伊勢・美濃・信濃・浅間

追分・高崎・大宮・江戸・鎌倉瑞泉寺・江戸 (癸

丑遊歴日録)

浦賀黒船視察行 (同年、六日間) (書簡七卷)

長崎隠密旅行 (同年、二ヶ月間)

江戸・京都、拜宮闕・大阪 (海路豊後) ・熊本・長

崎・下関・萩 (長崎紀行)

東上旅行 (同年末。一ヶ月間)

萩・周防富海 (海路大阪) ・京都・伊勢・尾張・中

仙道・江戸 (書簡・七卷)

下田踏海 (安政元年三月二十七日決行失敗。25才)

江戸・浦賀・鎌倉・下田・江戸護送行 (幽囚録・

(<sup>6</sup>)回顧録)

萩護送行 (同年九月) (幽囚録・回顧録その他)

右は人材を求め師を探索し求道の遍歴の果ての、行

動者松陰の蹉跎の履歴であり、松陰二十代前半に当っている。この間、接触就学した人物と研究読書した書物を紹介し松陰の猛烈な意欲と行動性の片鱗をうかがわねばならない。それが二十代後半の革命者松陰にもつながるからである。それは蹉跎への帰結であると共に学殖の蓄積であり、村塾の指導者、教育者そして革命者という松陰の思想体へのプロセス、死の詩人哲学者への素因となっているのである。順次、要点をみてゆく。

○九州遊歴。長崎ではじめて西洋文物に接し西洋事情を学習実感する。中国やオランダ領事館訪問、洋酒パシ菓子スーパの馳走。「上層に砲六門」の蘭船便乗などの経験。シナ人にシナ語の学習。平戸の五十日間は八十冊の書を写し読み感想を録した。特に西洋事情の図書に開眼された。その人は陽明学者鎧軒葉山佐内 (陽朱陰王といわれる佐藤一斎門下) と山鹿万介 (山鹿流宗家の嗣、家老格藩師) で前者に書物借用、後者に待用武功篇の講義を受けた。松陰が外国事情に通じ対外策や清国咸豊乱記などを著したのも次の図書が基礎

になったものである。

聖武記附録四冊（清の魏源の著。アヘン戦争における西洋兵器の威力実録） 辺備摘案（葉山佐内著） 伝習録（王陽明著） 主本三采幣（山鹿素行著） 西洋人日本紀事（独ケンペル著高橋景保訳。キリスト教布教史） 和蘭紀略（渋川六蔵記。ナポレオン侵略史） 北陲杞憂（犬塚印南著。英軍艦不法と長崎奉行松平康英の責任自殺） 諸厄利亜人性情志（通詞吉雄忠次郎訳。英国史とその豪強放恣の国民性） 丙戌異聞（高橋景保訳。ナポレオン侵略史） 泰西録話（古賀侗庵訳。西洋情勢） 西洋諸夷略表（諸外国渡来年表） 慎機論（渡辺華山の時局批判書。米国船モリソン号天保八年来航） 極論時事封事（古賀精里著） 蒸気船略説。鴉片始末。和蘭国王書翰。魯西亞国王書翰。イルクック西長書などその他西遊日記に詳しい。また長崎では二十三冊を読んだ。洗心洞割記（大塩平八郎著） 南郭文集（服部南郭著） 穀堂遺稿（古賀穀堂著） 新策四冊。演史国姓爺忠義伝。海国聞見録。隱憂録（アヘン戦争記事） など。

一一一

人物歴訪は前記の佐内、万介のほか野本弁左衛門、梶芳三郎、沢村弥三兵衛、桑山助之進、山崎木工助、天野勇衛、片山兵衛、岡口等伝、豊島権平、本沢斧之助、一瀬才八郎、深江玄三、辻川省吾、後藤亦次郎、牛島熊太郎、堀口荻之助、十時喜兵衛、山県三郎太夫、佐藤謙太郎、魯範二郎、高島浅五郎、鄭幹輔、吉村年三郎、宮川源之助、そして熊本では清正公の社に詣で弟敏三郎の啞の平癒を祈り、宮部鼎蔵（山鹿流兵学者）と知己となるが彼が池田屋で新選組の凶刃に倒れるまで江戸遊学時代、東北亡命も行を共にした。また、横井小楠（嘉永四年萩の村田清風訪門）の社中の者と知る。佐賀では草場佩川と知る、このように松陰の人物行脚は後々まで続けられたのである。

○江戸遊学。参勤交代の藩公に同伴遊学生二十人に加わる。松陰の妹婿で門下の小田村伊之助（楫取素彦）中村百合蔵（浩堂。明倫館の友）中村正亮（門下）などと同行。途次兵庫の楠公墓に感動し拓本を求め詩文に書き残した。江戸では素衣素食の貧欲な勉強を強行、人物遍歴など書簡に細かく報告されている。その

内容を日付順にたどってゆくことにする。

第一信は<sup>60</sup>「殿様益々御機嫌克く九日（嘉永四年四月）御着邸恐悦至極」に始まり、<sup>61</sup>「居住未だ定まらず中谷正亮（松陰門下）方世話に成居り候」四月二十五日に<sup>62</sup>「安積良斎翁へ入門仕候。五の日易経、八の日論語輪講討論、一の日書経。討論会も切実に云々」生活は「料理金山寺（味噌）梅実類に限り式日は鰹魚と定め」「有備館にて兵学会始め候」「天文台に参り候」<sup>63</sup>「高山彦九郎伝（会沢正志斎著、著者と後に水戸で会う）武士の亀鑑に候」<sup>64</sup>「女状（女性宛書簡）別して閉口に御座候。死に候へば相聞え申すべく夫迄は相断り置候」など松陰らしい。「会の多きに当惑仕候。（その会は書経洪範・武教全書・中庸・易会・継辞上伝・論語・呉子・大学・宦学会など）」「古賀謙一郎（茶溪）へも参候」松陰の健康法に<sup>65</sup>「飯は四合一勺、馬と撃劍、歩くこと（歩いて良斎・茶溪・山鹿素水へ一里許り）」とあり、萩門下生への勉強法の指針も忘れず「却て助け長ずるの弊に至り申すべく候」<sup>66</sup>「勉強せよと言い過ぎないこと」学は急ぐ勿れ、途中止

む勿れ、功を急ぐ勿れなどを伝え、江戸の兵学の実態をはやくも把握し三分類し「一は林家・佐藤一斎（彼は西洋辺の事老仏の害と排す）二は安積良斎・山鹿素水（彼は西洋事に消極、防禦の論のみ）三は古賀茶溪・佐久間象山（彼は西洋の事頻りに研究）——総合して習練仕り候はば」と松陰の多面性を示し<sup>67</sup>「江戸の兵学者尊程に之れ無し」と指摘、しかし膨大な研究対象にはさすがの松陰も力不及の愚味さを兄梅太郎に告白<sup>68</sup>「人の十歩百歩の間に一步を移し候位の事、三年五年には間に合ひ申す間敷、死して後已むを以て自ら戒め候」「歴史は一つも知り申さず（のち会沢に水戸で会い歴史学を開眼）本史も読まざれば成らず通鑑や綱目（共にシナの史書）二十一史亦浩漭なるかな史記より始め候」「経学、四書集註、宋・明・清諸家純儒之れあり周廉溪・程頤・張栻・朱熹……」と松陰の眼前のものに全身の骨は折れるばかり、更に「輿地学（地理学で、歴史学と共に松陰の時務論の根底となる）も一骨折れ申すべし、砲術学も一骨折れ……西洋兵書類も一骨折れ……本朝武器制も一骨折れ……文章も一

骨折れ……諸大名譜牒も一骨折れ……算術も一骨折れ……七書、集訟も一骨折れ……武道の書の士道要論・武士訓・武道初心集も一骨折れ申すべし」と、「その他芸術に至りては数を知らず候。詩歌・茶湯・書画・印・立花・能・謡・浄瑠璃、嗟々……これでは松陰の骨はばらばらになるだろう。「体中の骨何本あるかは存ぜず候へども跡はいかを食ひ候猫の様に成り申すべくや」と呆然の態である。

その間江戸の人物遍歴や本の貸借は挙げるに数を知らずの有様で松陰も「江戸人材長るべし」と言うに到る。そして「武芸はとて暇なく」休んでしまうのであるが、それにつけても今更に萩の地方学の暗陋と情報の乏しさに思い到るのである。「矩方（松陰）の遊学功を見る所なし」は素直な感想であろう。象山の門にも入り、松陰は節季に「良齋・山鹿・佐久間各々一分宛入り申し候」と兄梅太郎に東北遊旅費と合わせ十兩の無心を伝えている。儒学者鳥山新三郎確齋の塾蒼竜軒に入り多くの人材を識る、九州遊歴で熊本で知った宮部鼎蔵、南部藩江幡五郎（大和の森田節齋、

安芸の坂井虎山の門下塾長。安芸五郎とも）、この二人の知己が松陰の東北亡命など人生航路を大きく変えた。新三郎塾は後々松陰の居住となり薩摩の肝付七之丞、羽後の村上寛齋とも知り長州藩の土屋肅海、来原良蔵、井上壮太郎（松陰の知己門下）などこの塾に集った。

この頃松陰は書物を人に紹介し始めている。その一部を示してみると、出師前後表（諸葛公）・上高宗封事（胡澹庵）・争臣論（韓文公）・與韓愈論史書（柳々州）・上茫司諫書（歐陽公）・與高司諫書（同）・桐葉封弟弁（柳）・審勢審敵（蘇老泉）・送石昌言北使引（同）・策略五（蘇東坡）・待漏院記（玉元之）・相臣論（明季魏叔子）・上宰相第三書（韓）・至言（漢賈山）・拔本塞源論（王陽明）・諫官題名記（司馬溫公）・管仲論（老泉）・岳陽樓記（范希文）凡そ二十篇を某宛書簡に書いている。その他シナの史書関係と言行録が多く、交ったところでは和蘭風説書・勸農固本録（万尾時春著、農制法規関係）明訓一斑抄（水戸徳川斉昭著）・漢書刑法志その他シナの農学書が多

く(齊民要術・農圃大書その他この農事農民の理會が後の名もなき農民への期待と信頼となった。兵書は枚挙に及ばず、山鹿素水著水練兵説略の<sup>80</sup>序文を松陰は書いた。こういった勉学の自信が、東北遊歴を通じ地勢農政、經濟思想など、そして水戸学への接触の夢をふくらませたのである。武者修業のような気持で漁ったのである。

東北七命旅行の前に房相踏査があるが、これも同様の趣意からの探索であった。鎌倉の瑞泉寺の伯父竹院和尚は松陰の心の安定所で都度出かけて心の静謐を得ている。

○東北亡命行。江幡五郎の仇討行に義俠を感じ宮部鼎藏と同行し、忠臣蔵に因んで十二月十四日藩府の許可札を待たず出発。亡命の罪で後に士籍と世禄を奪われ浪人となる(松陰の号を始めて使用)結果を招いた。松陰は友との約束を破り長藩の名を汚すことを恐れ、「亡命は国家(藩)に負くが如しと雖も而もその罪は一身に止まる。之を国家を辱しむるに比すれば得失如何ぞや」と述べている(許可は得たが手形が届かなか

ただけであるし)藩公の親任があり、罪を得てもすぐに解決できると信じていたようである。事実その通りになり、後に十年遊学の許可を得て再度江戸遊学の旅に出ている。

<sup>81</sup>東北亡命行を決行した理由は、江戸での師山鹿素水(津軽)と安積良斎(岩代郡代)が東北出身であること、象山の考え方を、「入塾生砲術の爲めに入れ候ものにも必ず経学をさせ、経学の爲めに入れ候ものにも必ず砲術をさせ候様心懸けに御座候」と松陰は理解し、兵学と経学とに通曉し地勢と政経を実感し体験したかったこと、江戸での広範囲な勉強ぶりに「一心中の錯乱」「方寸の錯乱如何ぞや」といった重圧感を受けていた気持上の整理をする必要に迫られていて、偶々鳥山塾の知己<sup>82</sup>肝付七之亟(薩摩の兵学者)の体験談に啓発、同行者宮部の熱意と前記江幡五郎の仇討の協力、しかも盛岡の人だから地理への親近感などが松陰の心を動かし、更に確認しておきたかった水戸学への接触が叶えられるのである。この東北大旅行は、前人未踏の範囲のもので、この地理と農政經濟と

政治と思想、生活状況を探訪すれば確かなものが実感され精神上的の指向と安定が得られると信じたのである。ともあれ、松陰の思想体系に最も意義のあったこ

とは水戸訪門で、会沢正志齋に会い著書「新論」に接し藤田東湖の「弘道館記述義」に触れ、所謂水戸学の精神に心をゆるがされたことであった。義公水戸光圀の大日本史、肅公綱條の大日本史敍、烈公齋明の蝦夷地経営計画、藤田東湖のその計画意見書と直訴、正気歌、弘道館記述義、烈公の海防愚存、藤田幽谷の正名論、会沢正志齋の新論など、特に正志齋とその著新論は以前から知っていて渴望していたもので、水戸学経験以後の松陰の国史研究の情熱は火と燃えた。記紀以下国史の総ざらいを決意するにいたった。また、神皇正統記、中朝事実（素行）玉櫛（平田篤胤）それ以前記農民農事への関心は農政本論・経済要録（佐藤信淵）などに傾倒することになった。

水戸学は松陰の思考と必ずしも合致するものではないがエネルギー供給源として甚大なものがあった。水戸逍遙は平戸逗留と共に松陰の旅では最も長期だっ

た。その頃の漢詩は学と志との裡より燃える静かな高揚があり、後の「狂狷・狂獯」（松陰の自称語）はまらない。書劍飄然として天涯に滞まり／志業未だ遂げず歳空しく加はる／一身の百感誰れに向ってか説か／枉げて七字を借りて浩歌を発す／嗟、吾れ天賦もと劣弱／闕如す雄才と大略と／慷慨の志気空しく存すと雖も／読書未だ浩博に渉るを得ず／云々。

——東北亡命罪で、四ヶ月の旅の終りが帰国命令と士籍と禄の剥奪と浪人の運命、蹉跌の第一である。23才嘉永五年、この年梅田雲浜は幕府批判罪で浪人となる（後に入獄し松陰はその脱獄を計る）。萩の謹慎七ヶ月間とそれ以前に二十冊ばかりの著作があるが、東北遊日記・猛省録・睡余事録・業余慢録・雑録・旧鈔・屏居読書抄・辛亥筆記など多くの整理と著作と読書が続けられた。

読書は水戸で開眼した国史の勉強が始まり、日本書紀30巻、続日本紀40巻、日本逸史40巻、日本後記20巻・職官志6巻、令義解10巻、三代実録50巻といった具合であり、外国関係も海島逸誌・ロシア本紀、更にシ



ナ關係は史記・十八史略・漢書、また毛利史の吉田物語・日本外史・温故私記など歴史が目立った。謹慎中は白眼視もされて師の山田治心氣齋からは「足下の志確ならず大ならざるを如何ともするなし。交を絶たんと欲せば則ち義として絶つべからず」などいわれたが、松陰は「先生の交絶を受くといへども少しもおそれず何ぞ況や区々の不平なるをや」と答えている。蘇峯は「彼はその眼中すでに地方的固着心あらざりき彼は長州藩士として天下に立たず日本人士として天下に立てり云々」と評した。藩公は松陰の罪を惜しみ七ヶ月後の嘉永六年一月には十年間諸国遊学の許可を与え、第二回江戸遊学が実現した。

○第二回江戸遊学。まさに浪人松陰行状の旅であるが、人物遍歴は大和を中心に展開され、従前の葉山佐内、佐久間象山、水戸学とはまた違った人物遍歴だった。防府三田尻の富海から舟で四国多度津から金比羅へ、そして大阪へ。そこで和流砲術家坂本鼎齋・後藤松陰・藤沢東暎、大和五条の儒者漢学者森田節齋、八木の谷三山。節齋と三山は「大得意の友」で松陰は

意気投合しその地を中心に長期滞在し大阪や岸和田その他を歴訪した。節齋は山陽門下の大文章家で姿態粗野、後に京都に師弟を養成するが全て奇男子といわれ、松陰の書簡に「森田甚だ僕の文人たらんを欲す云々。文のことは甚だ益を得候へども身を茲に委し申すべくとも存ぜず心志之れが為め大いに動く云々」松陰も文章家であり「項羽紀・准陰伝・孫子十三篇の文法を聞き」感動し尊敬して心も動くほどの人物だった。粗野外貌を飾らぬところ、節齋妻も痘傷で松陰と似て色々と気易さを感じたものらしい。谷三山も「聾にして而も善く書を読み経伝百家通ぜざる所なし」といわれ、これも奇行の人物。岸和田の相馬九方、伊勢の足代権太夫・斉藤拙堂・水沼久大夫、桑名の森仲助、その他多数の人物を訪門し中仙道を浅間山を見て嘉永六年五月二十四日江戸鳥山新三郎の塾に入る。すぐ鎌倉の伯父竹院和尚を瑞泉寺に訪い静養し六月二日江戸に帰る。

○浦賀黒船視察行。六月四日米艦浦賀入港、象山塾に走りその足で浦賀へ、六日米艦江戸港に来航。松陰十

日に江戸着。江戸は黒船騒ぎであった。松陰の書簡に時局論が増し志士の名が俄かに多くなる。鳥山塾を梁山泊と戲称するのも肯ける。<sup>84</sup>「浦賀の事、古今未曾有の大変、国威の衰頹ここに至る云々。方今昇平三百年俯察仰觀するに漸く変革の勢を兆す云々」(梅太郎・玉木文之進宛)そして松陰も「方今の急務専ら洋学を修め居り候」と言い<sup>85</sup>「孰れ天下の瓦解遠からざるべし云々」「防長の多士何ぞ悠悠するや、南部の民交も容易ならず云々。内交外患常に相倚り衰季の光景恐るべし」「長崎ロシアの事如何。越後新潟へ七月二十六日黒船五艘来る由、未だ何国なるを知らず」など書簡に兵法(西洋と和流と合体すべし)時局対策、民政(乱は民の苦より起るべし)言論の自由(言路開けても実事に施すことならねば無益なり)上方防備、人材推奨の急務(廟堂無人と云ふべし)などの内容となり遂に藩公に上書するに至る(将及私言・急務条議・急務策・急務則・攘夷私議など)

○長崎隠密旅行。ロシアのプチャーチンの軍艦に塔乗し海外渡航するため嘉永六年九月十八日江戸発。実に

下田踏海の前年である。象山の愆愆は両拳とも同じであった。象山は曾て川路聖謨にオランダ船で海外留学生を献策、その意志を松陰に託したもので、当時ジョン万次郎が漂流し米国に渡り帰国後は通辞となっていたのを知りその方法も松陰に話した。松陰の海外脱出は長崎踏海と下田踏海があり両拳共失敗したのである。長崎隠密旅行は鳥山新三郎・永鳥三平(宮部鼎蔵と同郷熊本、鳥山塾門)・圭木(桂小五郎、後の木戸孝允)が見送った。京都で、松陰詩集の傑作<sup>86</sup>「恋闕の詩」を残し、一路長崎へ急いだ。しかし、ロシア艦は出航後で塔乗は失敗し、長崎、熊本の人物を歴訪し宮部鼎蔵を連れ萩に帰省し叔父玉木文之進、長井雅楽その他藩士に紹介。再び江戸に向った。

○東上旅行。海路大阪に着き大久保要(靖齋)、京都では梁川星巖・梅田源次郎(雲浜)・森田節齋・鵜飼吉左衛門(水戸藩、密勅降下の事で刑死)らに会いその他の志士探訪および人物評は松陰のこれからの指向を暗示するかのよう綿密を極めていた。人物評も前提のテーマにより評語に変化もあり好悪の規準も変異す

る。これは松陰の感情家という点もあろうが松陰の思惟指向、行動施策は常にその時その場の時局に応じて変転し、その照準と尺度を以て実効的な価値観となつて現われてくるからである。<sup>88</sup>「雲浜事務には甚だ鍊達、議論も正しく事務上に付いては益を得る事も多し。森田は疏豪、策なし、梅田は精密、策あり。但し二人共天下の大計には頗る疏なり」といった判を下している。

かくて伊勢と尾張の人物を巡り十二月二十七日江戸に帰る。明けて安政元年松陰25才、一月七日相模海岸視察の旅に出て藩公に「海戦策」を上書した。

○下田踏海。運命の日三月二十七日夜。江戸出発は三月三日、密かな送別の宴には永鳥三平・来原良蔵・赤川淡水・坪井竹槌・白井小助・宮部鼎蔵・佐々淳二郎・松田重助がいた。江戸出府の兄梅太郎にも会い血判で謹慎勉強すると安心させるために偽約して訣別、萩の金子重輔の強いての同行を容れて二人は下田に向つた。塔乗失敗は「回顧録」に詳しい。自首して松陰の牢獄生活がはじまる。教育者松陰もここからはじま

る。(象山・鳥井新三郎・白井小助ら連座、父百合之助・兄梅太郎・叔父玉木文之進ら屏居謹慎)そして革命者松陰の心機は除々に組み立てられてゆくのである。下田獄では獄卒に時局と国民の心構えを説き、地方史に関わる書を読みはじめた(三河風土記・真田三代記など)江戸獄では十八史略・唐詩選・三體詩・詩格・律髓・文章軌範・詩経・孫子など数知らず、<sup>89</sup>獄中にありとも敵愾の心一日として忘るべからず、忘れざれば一日も学問の切磋怠るべきに非ず」と言い、出府の兄梅太郎、妹婿小田村伊之助・小倉健作の兄弟、桂小五郎、来原良蔵・土屋肅海その他知己の宮部鼎蔵、鳥山新三郎など多くの応援差し入れがあり、<sup>90</sup>「僕獄にありて……其の樂しとする所を樂しみ罷り居り候……飢ゑて食ひ渴して飲み静にして思ひ寝ねて安し君子の心安んぞ往くとして安からざらん」と言う、これは後の著野山獄福堂策の心と通じている。現実を最大限に利用し活かす松陰の心で、後に、十年獄にいれば獄の大將になり、獄を革命すると言ったその心で獄改良の資料を詳細に書くことを忘れない。同罪の金子重

輔には萩で獄死するまで松陰の心遣りは並大抵ではなく、萩岩倉獄での獄死後は天下に檄を飛ばし追悼詩文集を作り彼を賞揚した。江戸獄の事を父は「案ずるな気分保養が肝要じゃ」と理解を示し村田清風は、下田は失敗したが志を天下に示し成功じゃと理解を示したが兄梅太郎は苦慮し責を負い江戸より帰藩、以後野山獄の松陰に絶大の力を竭し松陰の本然の姿を全うさせたのである。松陰が松陰たる真価を発揮し得たのは一族あげて（特に兄弟愛）の物神両面の理解と協力があつたからである。

註

- ①②③④⑤⑥九卷 ⑦二卷 ⑧九卷 ⑨七卷一六号  
 ⑩同、一三号 ⑪同、一五号 ⑫同、一七号  
 ⑬同、一九号 ⑭同、二〇号 ⑮同、二一号  
 ⑯同、三二号 ⑰同、三四号 ⑱同、四〇号  
 ⑲同、四三号 ⑳四二号より五一号 ㉑同、四九号  
 ㉒同、五五号 ㉓同、一三三頁 ㉔同、六八号  
 ㉕同、六七号以下七二号 ㉖同、七八号  
 ㉗同、八二号より八七号 ㉘九卷三四六頁 ㉙同、七八号  
 ㉚同、一一一号 ㉛同、一一〇号 ㉜二卷野山雜著

三、下田踏海失敗以後之時代

一般的に松陰のイメージはこれ以後で、大きくこの五年間を前期の松下村塾時代（野山獄・杉家幽囚）と後期の野山獄再入獄と刑死迄とに二分して抄録すると、

―前期―

(一)野山獄（金子重輔は岩倉獄。向合せの獄）

① 安政元年十月二十四日25才入牢（約一年間）。

年末迄の約二ヶ月間の読書百六冊、兄梅太郎は「書物周旋は如何様とも致すべく御出精待入候」と協力を約す。囚人富永有隣らへの教育開始。著書に幽囚録・二十一回猛士の説など。

② 明けて安政二年26才。正月金子重輔獄死。僧月性・黙霖と交通す。孟子の講義開始（杉家幽囚に引継ぐ）。この年読書五一二冊、著書は野山獄文稿（士規七則など有名）、野山雜著、獄中俳諧・賞月雜草（囚人文芸グループ指導）、冤魂慰草（重輔追悼

文集)、回顧録、清国威豊乱記(アヘン戦争と長髪賊乱物語)、書物目錄、抄制度通など。年末免獄され杉家に禁錮、松陰の孟子講義は父や兄の聴講で継続。

(二)杉家幽囚(松陰生家で広義の村塾時代、約三年間)

③ 安政三年27才、雲浜来菽し会う。七生説を書き信念を示す。久保塾(松陰の養母クマの養父久保五郎右衛門が玉木文之進の松下村塾を引継ぐ)のために松下村塾記を作る。門弟増大、武教全書を講ず。黙霖と論争し松陰の思惟大いに変移す。松陰の力で野山獄囚多く赦免。この年読書五〇五冊、著書は講孟余話(松陰思想ここに集約)武教全書講録(松陰の方法論集約)丙辰幽室文稿、丙辰日記、左氏兵戦抄、明倫抄、宋元明鑑紀奉使抄、借本録、丙辰會計、叢刺隨筆など。

④ 安政四年28才。久保清太郎の努力で村塾の寮舎(門弟居留処)完成し久保塾を正式に主宰(狭義の松下村塾以後一年間、「十二月五日を以て開けり富永有隣(野山獄囚の門弟でのち赦免された)之れに

主たり。…諸生驟々として進益し大いに旧觀を変ず」(書簡)村塾最盛期で、双壁(玄瑞・晋作)四天王(玄瑞・晋作・入江杉蔵・吉田稔麿)三無生(増野無咎・吉田無逸・松浦無窮)の名を残し後に多く松陰の指令旨に従い死す。この年読書四五〇冊、著書は丁巳幽室文稿・吉田語録・討賊始末(卑賤な女登波の孝心による仇討に感動し家に招泊させ援助を与え小説体を書く、所謂同和教育の嚆矢)、外蛮通略、外史彙材、二十一回叢書、日録・野山獄読書記、丁巳日乗など。松陰幽囚生活中も「飛耳長目」(間(スパイ)の活用)をフルに生かし情報は丹念な書簡(日に三通程度、多い日は五通)により収集し時局論、社会論、民政論、国策論を絶えず論述。漢詩も激情を加え時務的思想性が加わる。松陰妹文、久坂玄瑞と結婚。

⑤ 安政五年29才。時局切迫。⑥「狂夫の言」を書く「天下の大患はその大患たる所以を知らざるに在り苟も大患たる所以を知らば寧んぞ之れが計を為さざるを得んや。当今天下の亡びんことを已に決す云

々」「わが計を以て暴となし狂となすも亦宜なり。人以て暴となし狂となせども而も我猶言はざるべからざるはこれをおけば國家の亡立ちどころに至ると疑ひなければなり云々」と。竹島（現在韓国？）を開拓を上呈。村塾と明倫館と思想上対立し月性和解を図る。村塾拡張す。須佐の育英館と学生交流し塾生大井浜などで兵練に励む。（時に条約勅許ならず。井伊大老となる）藩公は松陰の上書建言を許す。松陰、対策一道・愚論（梁川星巖を通じ天覽）議大議、時勢論、私擬將策、対策など書く。密勅下る（八月）「勤王の魁仕り天下の諸藩に後れず」の考えで<sup>(9)</sup>次のことを策し門弟に指令す。

※水野土佐守暗殺策（九月、松浦松洞死去）

※伏見獄雲浜救助策（十月、赤根武人捕縛）

※閩部老中要撃策（十一月、十七名血盟団、老中周布政之助に「御許容」を願ひ出て失敗）

※大原三位西下策（十二月、公卿大原公を迎え長門に挙兵する策は失敗し伊藤博文、野村和作入牢）これら過激行動を指令する松陰を「學術不純にして人心

動搖」の罪で周布政之助（後自殺）らにより野山獄再入獄決定。その罪名を不当として門弟八名（品川弥二郎・前原一誠・入江杉藏・久保清太郎ら前記十七名血盟団の面々ら）起つ。長藩はこれに對して罪名詰問団の暴徒として投獄。十二月二十六日松陰野山獄に再入獄。松下村塾終焉。

※水戸密使（関鉄之助ら来萩、画策失敗）

※清未策（下関市清未藩乗っとり策失敗）

※伏見要駕策（安政六年二月。藩公の參觀出府を政治的不利とみての防害策。入江杉藏・野村和作の兄弟入牢）この事件は後期の再入獄以後に属するが松陰の革命的行動の指令はここで終るので便宜的に前期に入れておく。この間（安政五年）の著書は戊午幽室文稿・幽窓隨筆・続綱鑑録・急務四条・西洋歩兵論・松陰詩稿などである。この時期が草莽崛起論から、死の哲学への過渡期であった。この頃安政の大獄に当る。

― 後 期 ―

(三)野山獄再入獄と刑死（安政六年、30才）

松陰の画策と指令すべて蹉跌。門弟ら松陰の過激に反対し自重をすすめ松陰より絶交を宣す「江戸の諸友久坂、中谷、高杉なども皆僕と所見違ふなり。其の分れる所は僕は忠義をするつもり、諸友は功業をなす積り」と、一月二十四日憤激し<sup>(9)</sup>絶食(母のことで中止)松陰しきりに<sup>(10)</sup>死を考える。賜死の周施を門弟知己に依頼。「いまは幕府も諸候もはや酔人なれば扶持の術なし草莽崛起の人を望むほか頼みなし」(四月、象山の甥北山安世宛書)「僕が死を求むるは生きて事をなすべき目途なし。死んで人を感じる一理あらんか……一人なりと死んで見せたら朋友故旧生残ったもの共も少しは力を致して呉れうかと云ふ迄なり」(四月、野村和作のちの野村靖大臣宛書)と松陰の画策に命を張る者がいないことに松陰は絶句する。

「死を求めもせず死を辞しもせず獄に在っては獄で出来る事をする獄を出ては出て出来る事をする。時は云はず勢はいはず、出来る事をして行き当つれば又獄になりと首の座になりと行く所に行く」(四月念余日入江杉藏宛書。入江は和作と兄弟、のち晋作と奇兵隊

創設、禁門の変で戦死)五月十四日松陰江戸護送の幕命を長井雅楽江戸より持ち帰る。門人宛送別文を多数書き続ける。(東行前日記)十八日門人松浦松洞、松陰肖像を画き松陰自賛(九通)門人に与える(三分出魔兮諸葛已矣……至誠不動兮自古未之有)。二十四日、玄瑞と司獄(門人)福川犀之助の協力で密かに杉家に帰宅、父母親戚門下らと訣別。二十五日檻輿萩を發す。道中詩を作り、六月二十四日江戸桜田藩邸着。七月九日・九月五日・十月五日伝馬町獄幕吏訊問。「百折挫せず」「生死は度外に措きて唯だ言ふべきを言ふのみ」(七月晋作宛書)松陰は至誠以て諫死の心で遂に問部暗殺、大原三位西下策まで告白。「寅死罪二件あり」の通り幕吏より大喝「大胆不敵覚悟しろ」と宣告。在府門人の晋作・伊藤博文・桂小五郎・尾寺新之丞・飯田正伯ら物心両面の援助、特に晋作は金と紙と筆と書物の差入れに尽力。松陰は各方面に彼の指導精神を書き送る(四〇通の書簡詩文)獄囚の門人沼崎吉五郎(獄中孟子と孫子を聴講)の好意は松陰を「上座の隠居」として遇す。

十月二十日、永訣書を書く「平生の学問淺薄にして至誠天地を感格することを出来申さず非常の変に立到り申候。……幕府正議は丸に御取用ひ之れ無く……神国未だ地に墜ち申さず上に聖天子あり下に忠魂義魄充々致し候へば天下の事も余り御力落し之れなく候様願ひ奉り候。(父と叔父玉木と兄梅太郎宛書) 更に同日「諸友に語ぐ書」として「……死は人の免れざる所わが迂愚に於て益々惜しむに足らざるなり。水戸の鵜飼幸吉・越前の橋本佐内・京師の頼三樹三郎の諸人、皆当世の名士にして年齒皆壯われと伯仲す。今皆死して不巧の人となる吾れ豈に独り諸人に後るべけんや……我を哀しむ勿れ、我を哀しむは我を知るに如かず、我を知るはわが志を張りて之れを大にするに如かざるなり云々」と書き遺す。

二十六日、「留魂録」を書く「……天朝・幕府の間誠意相孚せざる所あり……幕吏必ず吾が説を是とせんと志を立てたれども蚊虻山を負ふの喩終に事をなすこと能はず……わが徳の菲薄なるによれば今はた誰をか尤め且つ怨まんや」。十月二十七日罪状申渡。正午伝馬

町獄で斬首。墓は小塚原回向院に橋本佐内と並ぶ。この安政六年は松陰にとって「吾輩皆に先かけて死んでみせたら観念して起るものあらん」といわしめたほど生命の究極に立ち、「蹉跌と苦患」の淵に身を寄せていたかのもあつた。たしかに俗語的発想も加わり以前のような模範的文章ではなくなっているが松陰のこの期に及んでなお激しい勉強意欲をみるならば失望はあつては「絶望」はありえない。まして「ヤケクソ」の要素は微塵もないのである。この最後の「絶望」の年の読書は、信立全集・日本外史・周易伝義・織田軍記・孟子正文・韃靼勝敗記・信長記・オランダ兵書・靖献遺言・北条五代記・世事見聞記・通鑑・西洋列侯史略・ロシア風土記・制度通・宋詩選・采覧異言・国史略・皇朝史略論・朱子語録・孝経・詩語・弘道館記述義・新論・白氏文集・逸史・集義和書・徂徠集・翁問答・国意考・鳩翁道話・朝鮮物語その他。著書は己未文稿・李氏焚書抄・李氏統藏書抄・東坡策批評・鴻鵠志・孫子評註・座獄日録・照顔録・東行前日記・読書雑抄・汪文抄・縛吾集・涙松集・永訣書・留魂



録などである。

松陰縁起を抄出すると翌年万延元年二月七日百日祭に萩の生地松本団子巖墓地に葬る。四年後文久三年正月五日高杉晋作・伊藤博文・品川弥二郎・白井小助（象山・良斎門下、松陰に尽し奇兵隊参謀）山尾庸三（晋作・玄瑞らと同志、伊藤・井上らと英国留学）赤根武人（松陰・雲浜門下、のち新撰組に属し山口市鰯石で斬首）らと松陰遺骨を世田谷区若林町に移す（東京松陰神社）同年藩命で吉田家再興、兄梅太郎長子小太郎が継ぐ（のち前原の乱に組し戦死）明治十五年萩松陰神社御賜金。自賛肖像・留魂録・恋闕詩（山河襟帯の詩）天覧。

註

- ① 四卷戊午幽室文稿 ② 八卷三七二号以下四四二号まで  
散見 ③ 同、四六二号  
④ 同、五一八号以下五二二号、五二五号、五三〇号、  
五三二号、五三三号、五三八号、五五八号、五五九号

#### 四、思想的変移の概括

以上年表的に松陰の生き方を大観したが次に思想的変移を概括したい。思想的には△下田踏海と野山獄▽（安政元年25才）を中心に前後に大別するのが便利であり、前期は割に平担で後期が松陰の激動期である。前期は学問上の純粋な思想であり、政治抜き純粋な行動に一貫し、それが長崎と下田の踏海の挙につながったのである。兵法学的方法と儒学（朱子）的思考と、遊歴時代を通じて得た国際的時局認識（時務論）と日本史観に立つ国家意識と（水戸学は後期に鮮烈に影響）、経済農政政治観に立つ地理地勢認識と民政認識と、京大和での文法学（節齋・三山・星巖・雲浜ら）と、所謂恋闕思想と、それらを通じて出来た「志」ある者との連帯感。そして、それらが自信と抱負となり前期松陰思想が組み立てられたのである。松陰思想体系のエポックをなす下田踏海は外夷を知ることによって国力を養い対等に立つという、敵愾主義であり開国的考えであって所謂攘夷銷国主義ではなかった。国

家神州の経倫上からの純粋な個人の行動であった。

亡命踏海の失敗は、後期の松陰詩にみるごとく自省自警の思惟に溢れ、踏海の罪への自省でなく失敗への後悔（野山獄と杉家幽囚の期間も「飛耳長目」の情報収集（アヘン戦争やナポレオン戦争なども）から「外夷の狡黠猖獗」の思想が生れ一時的に主戦論的護国主義となり、得意の兵法論上から海戦陸戦の方法を発表するが、それは机上の作戦であり幼稚さをまぬがれることは出来なかった。虚をつき奇襲作戦を狙うといった体のものであった。

安政元年から二年かけて神奈川条約が成立し「和親」が既定の事実となり、松陰は獄で士規士則を書き孟子を講義していたが、この一時期は静的な教育者松陰の姿をみせ、生涯で最も多い年間五一二冊の読書と賞月雑草といった一見して風雅に遊ぶ境地となり、また金子重輔追悼文集などへ精力を傾中した。前後して平和論が展開された。松陰の民主主義的な広範な思想は各方面に示され、特に<sup>(4)</sup>講孟余話（安政三年）は松陰思想の集大成の観を呈した。人間論（例えば忠孝・兄

弟・友情・幸福・努力・職責・死生の各論）国家論（王覇・天命・放伐・仏教・神道・民意・戦争・将兵・天皇の各論）文化論（治水・外交・大臣・学問・教師・教育法・文学・史学・税法・経済・環境の各論）その他で、この豊富な思想体系は逐一論及できないが現在時点に通用する内容である。

民の声は神の声 ●大臣とは才や学でなく識見と度量と果断である ●環境は自然を擁護せよ ●教師に最高の給与を与え為政者は教師を指導することなく教わねばならぬ……等々。平和論としては ●四海は同胞なり戦争は悪なり ●市民平等で人爵を廢し天爵を求めよと言ひ、条約後は ●信を夷狄に失わず国力を養うこと ●軍備を廢し軍艦大砲を鎔いて鋤を作り全国民に配し富国策を考え、のちに朝鮮満州シナを従え交易にて魯（ロシア）に失う所は鮮満にて償うべし云々の大抱負を披瀝する（侵略語のように見る向きもあるが当時の現実の国力を知る松陰にそんな野望を本気で考えたものとは思われない、理氣の発した気概である）

安政三、四年(27 28才)<sup>(9)</sup>月性と<sup>(10)</sup>黙霖が松陰の前に現われた。特に強い討幕論者黙霖の考え方は松陰にじわじわと乗り移るかのように思われた。当時松陰は天朝幕府両立論で、「僕は毛利家の臣なり故に日夜毛利に奉公することを練磨するなり毛利家は天子の臣なり故に日夜天子に奉公するなり。吾ら国主に忠勤するは即ち天子に忠勤する所以なり云々」また別に「天朝の中興は將軍の中興」「天朝の正論と幕府の正義の合体」「天朝は尊し將軍は重し」「將軍を憎む勿れ奸夫を伐て」「幕府を尊崇し天朝を奉事す」など松陰は公武合体的で將軍が正義を踏めば天朝に忠となる、不正義があれば「一誠感人」の心で諫言するのみ、感悟せしめるのみ、それが不可能の時は「我と將軍と同罪なり」と考えていた。

幕府と毛利藩と家臣という封建的撃縛の松陰と、スレートに天朝に直結する自由人僧黙霖の「一筆誅人」とは距離があった。松陰には「禍父兄に蒙らし累朋友に及ばんことなりその至恩厚誼にそむく所あらば則ち僕の一死誠に償ふに足らざるなり」という懼れもあ

った。月性・黙霖の、共に孤児的出生とはかなりの距離があった。だから黙霖は「たとえその人をして感悟せしむとも風俗頽墮な世に生まれてこれを奈何ともすべからず余一筆もて姦権の士を誅し忠孝の冤を雪ぐあらんのみ」と言うのである。遂に松陰は直諫死を持ち出す「幕府をして前罪を悉く知らしめ天子へ忠勤を遂げさすなりもしこの事が成らざらずして半途にて首を刎ねられたればそれ迄なり若し僕幽囚の身にて死なば吾れ必ず一人の吾が志を継ぐの士を後世に残し置くなり子々孫々に至りなばいつか時なきことは之無候一誠兆人を感じしむといふはこの事なり」と。「子々孫々へ伝へ皆々比干(紂王を諫止して殺さる)たらしめ候」と言う。松陰はあくまで直諫諫死の思想で藩公に申し入れ若し藩公が「諸大名且つ征夷をも規諫し」「遂にその罪を知らざる時は……天朝にこの由を奏聞し奉り勅旨を遵奉して事を行ふのみ」と言う。「幕府の悪口」をいわず「討幕」をいわない。

安政五年29才。遂に違勅のまま日米修好通商条約成立。松陰の直諫思想も限度のあることを知らされ

「墨夷の謀は神州の患たること必せり……天子震怒し勅を下して墨使を絶ち給ふ国患を思はず国辱を顧みず而して天勅を奉ぜず是れ將軍の罪にして天地も容れず……征夷は天下の賊なり今措きて討たざれば天下万世……それ吾れを何とか謂はん……」。この頃にいたり「狂夫の言」をはじめ狂狷・狂獯・狂頑・狂愚など自称し討幕的に傾斜し松陰年表の如く苛烈な實際行動を指令しはじめ、「人我を狂と」いうが「道を興すに狂獯者なるべし道を守るに狷者たれ」「放伐はやむをえざるなり」「樂しみ尽きて死生を忘る」等々矢つぎ早のキイパーソンぶりにさすがの門人たちも諫止し敬遠しはじめ、松陰の蹉跌感は極度に達した。絶食と縊死を試み、賜死の周施を頼むにいたった。一方、安政の大獄の火焰は燃え狂夫松陰も独り「討滅誅戮」「征夷討つべし」の火の玉となった。そして人々に失望した——

「諸候恃むべからず」「家老など諸役人みな身家を顧み……大義をもって自任すること能はず」獄囚の松陰は誰に大義大命を依託すればよいか、絶食縊死賜死も革命者覚醒のため、志を伝えるため「死んでみせたら

観念して起る者あらん」と希ったのである。しかし、人はいない。

「政府（藩）を相手にしたが一生の誤りなり」と気づき、松陰はここで「草莽の崛起」のみに期待せざるを得なくなつた。その草莽の崛起も「騒乱を起し人々を死地に陥れ」なくては起つことはない。「大平久しああ悲しい哉」の松陰の考えはこんな形になって表現されるようになった。「なにとぞ乱麻となれかし」「一たび血を見申さざる内は忠義の人も著はれ申さぬ」とを知り、遂には「百姓一揆につけ込む」術はないものかとさえ思うに至つた。しかし、「草莽もまた力なし」「凡民語るべからず」と知つた。草莽に責はない、「草莽を崛起する人」こそ必要なのである。

松陰が晋作に役人にでもなつて子供を産めと絶望的に吐く言葉にも或る位置につかなくては草莽崛起の人たることの出来ないことを悟つたからであるし、前原一誠に「一度は亡命して草莽崛起を謀らねばいけ申さず候」と言つたのは志なき小役人は無役と知つたからである。ナポレオンのような英雄的人物すら松陰は求

めるようになった。しかし、所詮「義卿（松陰）が崛起の人なり」と思わざるをえなかったのは安政六年刑死の年であった。

「死は好むべきにあらざる憎むべきにあらざる道尽き心安んずるこれ死所、心死すれば生も益なし、魂存すれば死も損なきなり」松陰が達した死の哲学である。江戸最後の獄で「死と志をいづれかに賭ける」と言い弟子に「死の香火として本を借し給へ」とは、松陰初心に立ち帰った安心の境地でもあった。最後に弟子に対して「ソクラテスの毒杯を受く」と覚悟し「死して以て諸友の心を堅めん」と希い、わが斬首を「悲しむより我を知れ我を知るよりわが志を広げよ」と遺して従容と死に処した。

ヒューマニスト松陰の「志」はどこへ、そして誰が広めたか——門弟の怒り——「仇を報ひ候はずば心安からず候」（高杉晋作）「義死せずんば何を以て先師に見えん」（前原一誠）が心に残る。久坂玄瑞は五年後に京都で戦死。

晋作は奇兵隊で大暴れし八年後に下関で死し、一誠は

前原の乱首謀として十七年後赦で刑死。

これに殉ずる松陰一統は玉木文之進割腹、嗣子乃木秀典弟戦死、松陰嗣子（兄梅太郎の子）小太郎戦死、梅太郎も「くさい」と糾弾されたが証拠不十分……しかも糾弾征討する側は同じ松陰門下の木戸・山県・品川などであったことは最後まで人間松陰の蹉跌の悲劇としか見ようがない。梅太郎は村塾を引き継ぎ主宰し、その「志」を広めようと努力した。松陰門下八十名、誰が「志」を広め得たか。

## 註

- ①二卷 ②③八巻書簡、以下引用文は書簡参照  
④四巻戊午幽室文稿、八巻書簡参照

## 参考文献

- 吉田松陰全集（旧岩波本、大和書房本）  
吉田松陰（徳富蘇峯・玖村敏雄・奈良本辰也・佐藤薫同名書）  
松陰吉田寅次郎伝（村岡繁）  
吉田松陰の殉国教育（その他、福本椿水）  
革命家吉田松陰（寺尾五郎）  
吉田松陰とその門下（古川薫）  
その他（省略）